



## 巻 頭 言

静岡赤十字病院院長

行 木 英 生 (1963 年卒)

病院のレベルを見る物差しの一つに臨床研究の奥行きと間口の広さがある。紹介を含めた患者数の多さと疾患の多彩さなど臨床の密度が濃くないと臨床研究や症例報告ができなくなる。初期臨床研修医制度が始まって一年以上経過した。一期生は指導医のご指導宜しく余裕を持って症例報告ができるようになってきた。今年の研究報には二期生の症例報告5編も載っている。われわれが同じような臨床経験を積み始めた頃よりもスピードがアップしている。かれらはCPCでもレポート提出のdutyがあるし、かなりのハードワークで臨床経験を積まされている。

もう一つの物差しに病院機能に付随する研究のまとめがある。今回は医療マネジメントとしてクリティカルパスが多方面から取り上げられている。院内で行われた医療マネジメント大会を聴いて、パスの完成度の高いものからもう少し練る必要があるレベルまでいろいろとあった。今後はDPCに対応できる効率の良い院内のパスの開発と医療連携パスへの取り組みが焦点になっていくものと思われる。

また、病院勤務者の過半数を占める看護師による看護研究は、病棟看護業務のアクティビティの高さと業務改善への姿勢を示すものであり、同時に、病棟での問題点も提示されている。優れたアウトカムにつながることを期待したい。

当院の研究報は年々学術雑誌としての体裁を整えつつあり、2005年版は検査部門からと研修医部門からの投稿が増えたこともあり、原著が11編、症例報告が14編あった。また学会報告記(14編)や各種委員会の活動報告も紙面を賑わせている。さらに各領域での学会誌や医学雑誌への投稿あるいは学会発表の年間報告が、巻末に学会活動として医局を含む各部門から提示されているが、忙しい日々の診療の中からまとまったデータを臨床報告として対外的に発表していくのは大変な努力が必要である。諸兄のたゆまない努力と熱意を高く評価したい。

この研究報が多くの人々の眼を通して評価され、患者さんの病気の治療と健康の増進に少しでも役に立ってくれることを願うとともに、研究報2005年版の発行に当たっては、病院研究報編集委員会の各委員の努力と、実務担当の天野いづみさんの時間を惜しまない対応に心から感謝を申し上げる。

2005.12.31